



1. 研究主題について

「考え深める児童の育成」－言葉の力を基盤にして－
本校では、4つの観点から研究主題を
「考えを深める児童の育成」とし、
「言葉の力を基盤として」
を副主題に設定した。



一つ目は子どもを取り巻く社会的背景である。私たちは様々な情報をもとに日々判断し、意思決定して行動している。そのための「主体的に判断して行動していく力」は、未来を予測することが難しく変化の激しい現代に於いて極めて重要な力である。現代社会は、インターネットなどの情報網が普及し、多様な情報があふれており、子どもの生活にも深く浸透している。しかし、こうした、便利で快適な生活は、子ども達に直接体験や失敗経験から学ぶ機会の減少を招いている。そのような子どもを取り巻く社会の状況を踏まえた時、上述のような力を身に付けさせるために一人一人の子どもに対して、意図的に情報や知識をもとに「考え」「活用」する場面をつくったり、「体験」から学ぶ機会を設けたりすることが重要である。やがて社会を担う子どもたちには、学校におけるあらゆる教育活動を通して、体験と言葉をつないで自分の言葉で表現していく力や、知識や情報をもとに考え、判断する力を培うことが不可欠である。

二つ目は本校の児童の実態からである。本が好きである。そして、体験活動を好み、意欲的に見学や観察・実験、調査活動に取り組む姿が見られる。しかし、学習活動の基盤となる言語に関する能力にはつぎのような課題が見られる。

- 資料に何が書いてあるのかを正確に読み取ること
- 体験と言葉とを結び付けてイメージ豊かに理解すること
- 自分の考えや感情を適切に言葉で表現すること



つまり、言葉によって考えることや表現することにその課題は集約される。こうした実態を鑑み、資料を読み取る力を身に付けさせることや、理由・根拠を示して自分なりの言葉で表現させること、語彙を豊かにして言葉の意味やイメージを理解できるようにさせること、自らの体験を知識や認識に結び付けられることなどの必要性を感じてきた。このような、児童の実態・教師の願いから「考えを深める児童の育成」を目指したいと考えた。

三つ目の観点は、今日的な教育課題である。新しい学習指導要領が3月に告示された。その方針は、「生きる力」をより一層はぐくむこととし、総則本文では、「生きる力」をはぐくむための学力として次の三点が示された。

- 基礎的・基本的な知識及び、技能を確実に習得させること
- 知識・技能を活用することにより思考力・判断力・表現力を育成すること
- 主体的に学習に取り組む態度を養うこと

つまり、これから児童に身につけさせなければならない重要な学力の一つが「思考力・判断力・表現力の育成」である。

このことは、本校の研究の目指す「考えを深める」という児童像と大きく重なる。新学習指導要領でも言語活動の重要性が指摘されており、平成23年度完全実施を目前にしてこの研究に今、取り組むことは、大きな意味があると考えた。



四つめの観点は、本校の教育環境からである。本校は狛江市・文部科学省からの支援を受け、蔵書が年々増え、学校図書館が充実してきている。また、日頃より学校司書、司書教諭を中心に読書指導や調べ学習などの情報活用指導の取り組みも意図的・計画的に進めてきた。そして、図書室の隣にパソコン室を設置し学習資料センターとしての機能を備えた作りとなっている。そうした教育環境を活用した研究を深めたいと考えた。

この4つの観点から、これまでの教育活動を振り返ってみたとき、反省する点があることに気が付いた。

- 言葉の力をつけるための日常的な活動を重視してきたか
 - 本校の特色である学校図書館が子どもたちの思考力を育成するために十分活用されてきたか
 - 体験したことを、自分の考えに結び付けるための書くことや話すことの学習が不十分でなかったか
- などである。

研究一年次の19年度は、児童の実態から「言語の力」の充実を図る必要性があると考え、叙述に沿って読んだり、資料から分かることを読み取ったり、日常の生活経験から感じ取ったことを表したりする指導の工夫や手立てを考え、研究に取り組んだ。

以上の私たちの教育活動の反省や19年度の研究から20年度の研



次のような視点がはっきりしてきた。

- 日常的な指導の積み重ねが大切であること
- 本校の情報センター機能を備えた図書館の教育環境を生かすことが重要であること
- 書くことが思考と深く関連していること

二年次は、上記の3つを研究の視点にし「考えを深める児童の育成」を目指した。

2. 研究主題に迫るために

(1) 主題にある力について

研究主題にある力「言葉の力」「考える力」について、以下のように共通理解し、三つの育成を目指すことにした。

言葉の力・・・言葉を理解する力であり、言葉を活用する力であり、言葉で伝え合う力

考える力・・・論理的に理解し、思考し、表現する力

(2) 目指す学習

一年次の研究を基に、主題に迫るための学習を次のようにとらえた。

豊かな「体験」を基に

- 日常的な活動を生かし・・・A分科会
- 調べ・・・B分科会
- 書いて・・・C分科会

考える学習

(3) 研究の内容及び方法

二年次の研究は、手立てについて、学年の発達段階を加味しながら次の三つの分科会から系統性を考慮しながら理論を探り、学年・専科・特別支援学級で実践を通して検証して確かめていった。

A分科会 ー日常的な活動ー

育てたい児童像を「相手や場面に合わせ、自分の思いや考えを伝えられる子」と設定し、「言葉の力を育てるための日常的な活動を重視した指導の工夫」について取り組んだ分科会である。

具体的には、音読・暗唱、漢字の読み書き、発表における話形や声の大きさなどの基本的な力を定着させること、各教科においても記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組むことが研究の内容である。そこで、言語に関する能力の育成のために、国語科を中心に朝の会や、あらゆる場面で、日常的な活動を充実させることに取り組んだ。

・言葉で伝えることの良さや、分かってもらえた楽しさを味わわせることを通して言語活動を豊かにし語彙を増やす。

・直接体験の場を多く設定し、体験したことについて、書く・話す・聞くという活動を大切にする。

新学習指導要領「総則」では、「指導計画作成の留意すべき事項」にある「言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、言語活動を充実すること」に通じる研究内容である。

B分科会 ー図書館活用・調べ学習ー

育てたい児童像を「体験・資料・見学・調査活動から生まれた疑問や課題を大切に、図書館などを活用して新たな考え方を育てられる子」と設定し、学校図書館活用・調べ学習を重視した指導の工夫について取り組んだ分科会である。

具体的には、学年の発達段階に応じて、調べ学習の原動力となる疑問をもたせる体験の工夫、課題に沿った調べ学習のさせ方や追究したことのまとめ方の工夫に取り組んだ。図鑑や資料を活用して調べる楽しさに触れるとともに、分類番号や索引・目次から検索する技能を図ること、課題を整理するカードの活用についても研究を進めた。

同じく「総則」では、「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実する」ことに関連する研究内容である。

C分科会 ー書くことによる思考ー

育てたい児童像を「資料や調べたことから、自分の考えを論理的に書くことができる子」と設定し、書くことによる思考を重視した指導の工夫について取り組んだ分科会である。

具体的には、「書く」ことに重点を置き、これまでの自分の考え方や見方を振り返り、新しい見方を探究・発見し、自分の見方や考え方を広げさせるといった学習活動に取り組んだ。体験したことを基に、考えたことを書いたり、事実と意見を区別して整理したり、根拠や理由を示して考えを書くワークシートの工夫、書いて考えたことを発表し交流する活動などの充実を試みた。

同じく「総則」の「児童の思考力、判断力、表現力をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視すること」と「体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視すること」につながる研究である。